

■ 本邦輸入勢による実需のドル買いもそろそろ一服？

ついに、ドル/円が121円台に乗せる動きとなってきた。

想定以上で驚異的なスピード感を伴う値上がりと言える。国内輸入企業には「期末」の手当てを急がざるを得ない事情がある。そこに目をつけた投機筋は、ドルコールオプションにまとまった買いを入れる。そうしたフローが次から次に舞い込むといった状況である。

例えば、先週行われたFOMCの前までは「円安」が主導するドル/円の上昇であった。それがFOMC通過後には「円安」プラス「ドル高」の動きに変化している。

前回更新分の本欄で、FOMCの結果について「これ以上はタカ派寄りにならないと思われる」と述べたが、それは見誤りであった。

先週末にかけては、ウォーラーFRB理事やセントルイス連銀のブラード総裁、ミネアポリス連銀のカシュカリ総裁らから、想定以上にタカ派寄りの発言が相次いで飛び出し、そうした発言がドル高に加勢した。

ブラード氏に至っては、今後の利上げについて「年内残り6回の政策会合のうち、5回で0.5%の利上げが必要」と言い放つほどで、それだけ目の前のインフレを抑制する必要が差し迫ったものであることをあらためて市場は思い知らされている。

もちろん、仮に5月と6月のFOMCで0.5%の利上げを積極的に実施すれば、そのインフレ抑制効果が早めに現れる可能性も十分にあり。その頃までには、ウクライナ情勢にも何らかの転機が訪れている可能性だってある。

対ロシア制裁がそう簡単に解除の方向へ向かうとは思えないが、状況次第で先行きの不透明感が徐々に薄らいでいくということも考えられる。むしろ、インフレ抑制も大事だが、景気減速を回避することも重要である。

なお、本邦輸入勢による急ぎの手当ても今週いっぱいには落ち着く可能性があり、その点は留意しておきたい。また、足元で原油先物価格が再び強含みの展開となってきたことも見逃せない。対ロシア制裁の影響はもちろんであるが、サウジアラビアやアラブ首長国連邦(UAE)が西側からの増産要請に対して首を縦に振らないことも大きい。

サウジやUAEにしてみれば「自分たちはイエメンの新イラン武装勢力フーシ派による軍事攻撃を受けて困っているのに、米国などの同盟国が何ら手を差し伸べてくれないから原油の増産要請にも応じない」ということらしい。

加えて、欧州諸国が追加の対ロシア制裁の検討を始めているとされることも、原油価格の再上昇を支援している。欧州が本格的な禁輸措置を講じる前にサウジとUAEのご機嫌をとっておかないと、市場はかなり混乱することとなりそうである。

原油価格が一段の上値を試すとなれば、まずはユーロに売り圧力がかかりやすくなり、ユーロ/ドルは20年3月安値=1.0635ドルを下抜けてもおかしくない。差し当たっては1.0960ドル処を軸とした1.0800-1.1120ドルのレンジ内での値動きを想定しておきたい。

なお、原油価格に急動意が見られると対資源国通貨中心にドル安が進み、昨日(23日)も一時そうであったように、結果としてドル/円が下押す場面も見られている。繰り返すも期末・期替わりが近づいていることで、そろそろ相場の顔つきに変化が生じる可能性もあるものと警戒したい。少なくとも、ドル/円の一段の上値を取りに行くことには慎重でありたい。むしろ、120円台半ばの水準をクリアに下抜ける場面があれば、そこから120円割れの水準を試しに行くこともあり得ると見る。

(03月24日 09:30)